

20世紀迄の日本は、国土が狭く資源も無いというのが小中学校の授業でも定説でした。

しかし、21世紀からは領海を含めた「排他的経済水域EEZ」の面積では、約447万平方キロと国土面積38万平方キロの約12倍の広さを持っており、この広さは世界第6位となっています。

日本の国土面積は約38万平方キロメートル。

これは世界61位である。

ところが排他的経済水域と領海を足した面積は447万平方キロメートル。

一気に世界で6位に躍り出る。これで驚いてはいけなない。

海の深さ、つまり海水の体積を比較すると世界4位にまでランクアップするのだ。

海には海底資源、海洋資源、水産資源などさまざまな資源がある。

たとえば東シナ海にはイラクの油田に匹敵する1000億バレルの原油埋蔵量が存在すると試算されている。

レアアースは「産業のビタミン」とも呼ばれ、再生可能エネルギー技術やエレクトロニクス、医療技術分野など、日本が誇る最先端産業に必須の金属元素です。

その一方で、レアアースの世界生産は中国の寡占状態にあり、不安定な価格や供給構造の脆弱性といった潜在的なリスクが問題となっています。

こうした背景の中、2012年に日本の排他的経済水域（EEZ）内でレアアースを豊富に含む深海堆積物「レアアース泥」が発見され、将来の開発に向けた期待が高まっています。

政府は日本最東端の南鳥島（東京都小笠原村）周辺の海底に埋蔵されるコバルトなどのレアメタル（希少金属）について、採掘の商業化を進める方針を固めた。

2028年末までに採掘技術を確認させ、排他的経済水域（EEZ）内での採掘場所も決める予定だ。

中国も同島周辺の豊富な海底資源に関心を強めており、資源確保に向けて対抗する狙いがある。

早稲田大学の高谷雄太郎講師と東京大学の加藤泰浩教授らの研究チームは、日本の最東端にある南鳥島（東京都）周辺の海底下にあるレアアース（希土類）の資源量が世界の消費量の数百年分に相当する1600万トン超に達することを明らかにした。

2018年、早稲田大学の高谷雄太郎講師と東京大学の加藤泰浩教授らの研究チームが南鳥島の南方にある約2500平方キロメートルの海域で海底のサンプルを25カ所で採集し、レアアースの濃度を分析した。

その結果、ハイブリッド車などの強力な磁石に使うジスプロシウムは世界需要の730年分、レーザーなどに使うイットリウムは780年分に相当するという。

レアアースを効率的に回収する技術も確立した。

メタンハイドレートは、メタンと水が低温・高圧の状態では結晶化した氷状の物質で、火をつけると燃えるため「燃える氷」とも呼ばれています。

メタンハイドレートの生産技術はまだ確立しておらず、現在、において研究開発が進めら

れている最中です。効率的な生産技術が開発されれば、日本の天然ガス消費量の100年分以上が日本の周辺の海に存在すると見られていることから、将来国産の有望な炭化水素資源として期待されます。

JOGMECがこれまでに行ってきた調査を基に試算すると、今回の試験を行った拓洋第5海山だけでも日本の年間消費量約88年分のコバルト、約12年分のニッケルを含むクラストの存在が期待されるという。

詳細資料は、こちらから [ダウンロード](#)

[海上保安庁パンフ](#)

世界の排他的経済水域面積ランキング

